

舞踊における創作者の表現内容と鑑賞者の享受内容に関する研究

—Contemporary Dance 作品と鑑賞者のイメージの比較を中心に—

中 神 惟 川 口 千 代

(大学院発達教育学研究科
研修者)

(教育学科教授)

1. 緒言

日本の現代社会における舞踊 (dance) は、劇場や野外のスペースなどで行われているものをはじめ、宗教的・儀式的な舞踊、学校で行われている教育舞踊 (身体表現やフォークダンスなど)、治療的な舞踊 (ダンスセラピー) などに細分化され多様化してきている。また近年では、川口¹⁾の研究にもみられるように、運動への参加率が年齢を追うごとに減少している運動・スポーツ種目において、舞踊 (dance) は年齢を追うごとに参加率が増加傾向にあることから、生涯学習の一環として多くの人に親しまれてきている。

しかし、舞踊 (dance) が多様化してきているにもかかわらず、芸術文化の他の領域 (音楽・美術など) と比べると、舞踊鑑賞のために劇場やホールへ直接足を運ぶ人は限られており、その認知度は低いと思われる。その背景として、尼ヶ崎²⁾が述べている日本の舞踊制度の問題が挙げられる。尼ヶ崎によると、日本の舞踊 (dance) 界には、西洋的芸術観の枠には収まらない伝統的芸道や素人の踊りへの欲望や日本の社会システムなどが混在している。

また、日本の舞踊家が国内では評価されずに海外で国際的に評価を受けるケースが多い現状は、日本という国や社会における舞踊の位置づけを問題視せざるをえない。

筆者が事前に行った、舞踊鑑賞者を対象とした予備調査において、舞踊を劇場やホールで鑑賞した経験があると答えた人数は全体の約40%であった。舞踊ジャンル別に比較すると、クラシックバレエやヒップホップが半数以上を占め

ており、モダンダンスやコンテンポラリーダンスといった舞踊ジャンルは全体の約10%であった。

筆者は、幼少期よりさまざまな舞踊 (dance) に触れてきたが、特に現在では「舞踊 (dance) = 自分と向き合う、自己表現」という内面性を大切にとらえるように変容してきた。モダンダンスやコンテンポラリーダンスを通して、舞踊 (dance) が、「人間の心と身体そのものが密接に結びついている」ということを実感するようになった。そこで、受け手である鑑賞者にとって、送り手である踊り手 (創作者) の発する意図をどのように知覚しているのかという部分に疑問を持つようになった。

また、舞踊 (dance) 鑑賞未経験者と経験者では、舞踊作品の捉え方が異なるのではないかと考える。それは、単に舞踊 (dance) を観るという行為でも、さまざまな観かたがあると筆者は考えるからである。

本論では以上のことをふまえ、鑑賞者と踊り手における享受内容のメカニズムを明らかにしていくとともに、鑑賞者における作品の鑑賞態度の相違について論及する。

2. 目的

本研究では、舞踊鑑賞の未経験者および経験者を対象に、筆者自身が創作した舞踊作品を鑑賞してもらい、その前後にアンケート調査を実施する。このアンケート調査の結果から次の事柄を明らかにする。

①アンケート調査で得られた回答をKJ法 (発想法)³⁾によりカテゴリーに分類し、鑑賞未

経験者および鑑賞経験者間での、舞踊の捉え方を比較検討する。

- ②鑑賞前と鑑賞後でのそれぞれの、舞踊に対するイメージについて考察する。
- ③鑑賞者と踊り手（筆者）間での、作品に対するイメージを比較する。

以上の事柄を通して、舞踊作品の上演における、送り手と受け手のメカニズムを明らかにするとともに、鑑賞未経験者および鑑賞経験者はどのような視点やイメージをもって舞踊（dance）を鑑賞しているのか、検討していく。また、日本という国や社会における舞踊（dance）の位置づけを把握しつつ、今後の創作活動や日本における舞踊（dance）の発展に役立てていきたい。

3. 方法

1) 研究方法

調査期間：平成20年9月25日から10月3日までの間で、5回にわけて調査を実施した。上演場所は5回中2回が別の場所での鑑賞とする。

質問用紙：質問用紙は、①未経験者用（鑑賞前）、②経験者用（鑑賞前）、③未経験者用（鑑賞後）、④経験者用（鑑賞後）、⑤鑑賞用チェックリスト^{注※}（鑑賞後）の5種類を作成した。

注※『鑑賞用チェックリスト』は、先行研究「動きの感情価に関する研究その2. 舞踊作品の評定比較」⁹⁾で使用された評定表を用いた。I群「運動の基本的な型をもたらししていると思われる語」18項目、II群「表し出される多様な感情を分類した語」25項目の計43項目の対語表である。

調査対象：K大学在学中の学生190名および学外者9名（男性5名・女性4名）を対象に、筆者が創作した舞踊作品を鑑賞し、アンケート調査を実施した。なお、学外者はすべて舞踊（dance）経験者である。

鑑賞作品：タイトル「みち」
筆者自身が創作した、約8分間のソ

ロ作品

2) 分析方法

〈KJ法〉

質問用紙①・③の、舞踊（dance）に対するイメージと、②・④の、鑑賞した作品に対するイメージの自由記述については、KJ法（発想法）を用いて、カテゴリー分けをし、観点を見出すことにした。

まず、自由記述で書かれている文章を「1事項1カードの原則」により、できるだけ一言に「単位化」したものを紙に記し、「カード化」する。次に、この「カード化」したものを、鑑賞用チェックリストの感情語群I群（運動の基本的な型をもたらししている語）・II群（表し出される多様な感情を分類した語）を参考に、大きく2つにわけ、そこに当てはまらないものはそれらでグループをつくった。そして、グループ内で「圧縮化」し、圧縮したグループに見出しをつけることにした。この見出しを、「小カテゴリー」とし、さらに観点を絞るため、小カテゴリーをさらに「圧縮化」し、「大カテゴリー」にグループ化した。

〈因子分析〉

鑑賞用チェックリストの43項目について、未経験者と経験者を合わせた回答を、最尤法プロマックス回転による因子分析を実施した。この分析により、鑑賞者における作品鑑賞の際の潜在的観点を探ることにする。

また、この結果をもとに、各項目別にt検定（等分散を仮定した2標本による検定）を行い、作品鑑賞の際の潜在的観点における、未経験者と経験者間の比較を行う。

4. 結果と考察

本論文では紙数の関係上、因子分析の結果および考察については省略する。

1) 鑑賞前の結果と考察

①鑑賞前の未経験者の舞踊に対するイメージ
舞踊（dance）についてのイメージの自由記述を、KJ法で分析した。

まず、鑑賞用チェックリストの項目を参考に、「I群・運動の基本的な型をもたらししている語」

「Ⅱ群・表し出される多様な感情を表した語」「受け手の感情」「その他」と大カテゴリーを4つ設定し、そこから小カテゴリーを抽出していった。

最も多かったイメージは、Ⅱ群「楽しい・楽しそう」で53人が回答していた。また、Ⅰ群「リズム・リズムカル」という回答を12人がしており、この2つの回答から「リズムカル」な動きが「楽しい・楽しそう」という感覚に繋がっていることがわかる。次に多かった回答では、Ⅰ群「カッコいい」44人、Ⅱ群「華やか・華麗」41人、受け手の感情「美しい・きれい」37人であった。これら3つのカテゴリーに共通しているのは、舞踊鑑賞の未経験者でも容易に動きをイメージできる言葉だということである。

Ⅱ群に分類された回答は、「静的」と「明るい」の小カテゴリーに分けられた。ここで注目すべきは、舞踊（dance）のイメージとして「暗い」感情を表す回答がなかったことである。また、「受け手の感情」のカテゴリーでは、すべての回答がプラスのイメージを連想させるものであり、その中で「感動的」「わくわくする」といった鑑賞者自身の心に直接影響する回答を19人がしていた。これらをふまえると、未経験者全体を通して、舞踊（dance）をプラス志向で捉えていることが認められる。

「芸術的」の小カテゴリー内では、「音楽」という観点から回答している人が最も多く、「音楽に合わせて体を動かす」「音楽が特徴的」といった、舞踊と音楽の関係性を重要視した意見がみられた。その他に、「自己表現」や「感情表現」をする手段の一つとして舞踊（dance）を捉えている回答もあった。これは舞踊（dance）をする「身体」よりも、そこから湧きおこる「感情」や「表現」に注目している回答といえる。

②鑑賞前の経験者の舞踊に対するイメージ

舞踊（dance）についてのイメージの自由記述を、未経験者と同様にKJ法で分析した。

Ⅰ群に関して回答している鑑賞者はわずか6人であり、未経験者との違いが大きくみられた。Ⅱ群では、未経験者ではみられなかった「暗い」

イメージの言葉がみられた。

最も未経験者と異なっていた点は、「人間的」カテゴリーの出現である。ここでは、経験者の中でも特に、舞踊（dance）の上級経験者たちの回答が多い。「生・死」「心・魂」「生き様」などの回答から、舞踊（dance）を通して、舞台上の踊り手を人間そのものとしてリアルに感じていることがわかる。

ダンサーの身体的特徴を捉えている回答では、未経験者と同様に「体が柔らかい」が多かった。しかし、身体に関する回答は全体の5人しか回答しておらず、舞踊（dance）をイメージするとき、経験者にとって身体的特徴はあまり重要ではないことが伺える。

経験者の中には、舞踊（dance）と音楽のかかわりを舞踊（dance）のジャンル別に指摘するような回答や、「興味を持つ人・持たない人に差がある」などの回答がみられた。

また、未経験者の回答でもみられたような「自己表現」「感情的」という回答が多く、舞踊（dance）のイメージとして、「表現」に重点をおいた回答が多かった。

③未経験者と経験者間の比較考察

未経験者と経験者それぞれの結果から、未経験者は舞踊（dance）を、「動き」の視覚的に捉えられる要素のみで捉えている人が多いが、それに対して経験者は、「動き」から表される「感情」や、踊り手を「人間そのもの」として感じ取っていると考えられる。

また、舞踊（dance）のイメージとして未経験者の「現実離れしているもの」という回答と、経験者の「リアル」という回答から、非常に温度差があると感じられる。また、上級経験者の中では、舞踊（dance）に対するイメージが「生・死」といった回答もあり、未経験者が「娯乐的」と捉えている回答と全く異なるものだと思われる。これは、舞踊（dance）ジャンルにおける未経験者のイメージがクラシックバレエを想定しているのに対し、上級経験者のイメージする舞踊（dance）ジャンルがモダンダンスやコンテンポラリーダンスであるという違いに

よるものだと考えられる。

また、経験者と上級経験者間でも、踊り手として普段活動している上級経験者は、より自分に近いものであるがゆえに、「呼吸」「心」「生・死」というような自己から発するという観点で人間的な回答が多かったのではないかと推測する。

2) 鑑賞後の結果と考察

①鑑賞後の未経験者の舞踊に対するイメージ

鑑賞した作品についての、イメージの自由記述を、KJ法で分析した。

まず、鑑賞用チェックリストの項目を参考に、「I群・運動の基本的な型をもたらししている語」「II群・表し出される多様な感情を表した語」「受け手の感情」「その他」と大カテゴリーを4つ設定し、そこから小カテゴリーを抽出していった。

I群（運動の基本的な型）の「動き全体を通して見ている」のカテゴリーには、「動きが幅広い」「1つの流れができていく」のように、動きの質を見ながらも全体を把握しようとしているように思われる回答や、「予想ができない動き」「非日常的な動き」のように、ある時点での動きを見ているというよりも動き全体を集約し、自分の言葉に置き換えた回答があった。

「強い動き」のカテゴリーは28人、また「弱い動き」のカテゴリーには12人が含まれ、作品が時間的に進むとともに動きの質も多様に変化を遂げていることから、鑑賞者はそこから最も印象に残った動きの質を回答していると考えられる。

I群（運動の基本的な型）の大カテゴリー内で最も多くの人々が回答している小カテゴリーは、「指先・足先の動きに着目」で、48人が回答している。創作者は、「不安」や「模索」、「葛藤」といった感情を、指先や足先の細かい動きで表現しており、それが鑑賞者にとっては視覚的にも受け取りやすく、記憶に残る動きの一つとなっていたことが認められる。

しかし、ほとんどの人が手足の動きを視覚的に受け取っているのみで、これらの動きから創

作者の意図した、「不安」や「葛藤」などの感情について回答している人は見られなかった。

II群（多様な感情を表した語）の大カテゴリー内は、まず「後向きな感情」「前向きな感情」の2つのカテゴリーに分けられた。

「後ろ向きな感情」のカテゴリー内では、①外部の力を強調した回答、②作品の中の人物の心情を強調した回答に分かれた。「外部の力」を感じた意見の中では、その「力」となる対象物（「壁」など）を思い描いた人と、対象物に対して生まれる感情に着目している人とに分かれた。その中で、「葛藤」という言葉で表現している鑑賞者が多く見受けられ、舞台上では見えていない何かを、作品を通して想像していることがわかる。また、「後向きな感情」を持ちつつも、「必死さ」「もがいている」のようにそれを受け入れられない感情として表している回答もあった。

II群のカテゴリー内で注目すべき点は、鑑賞前の未経験者のイメージではみられなかった、「暗い」「後向きな」感情が、舞踊鑑賞後では「前向きな」感情以上に多かったことである。鑑賞前の未経験者にとって、舞踊（dance）に対するイメージは比較的明るいものであったが、今回の作品を鑑賞することで舞踊（dance）に対する新たなイメージが生まれたと認められる。

また、「演技・演劇的」と捉えた回答が多数あり、舞踊（dance）を鑑賞する上で、視覚的かつ感情的に捉えている人が多いことがわかった。「前向きな感情」として捉えている回答にもこれと同じことがいえる。ここでは、「すすんでいく」「立ち向かっていく」のように方向性を示す回答から、「強い気持ち」「意志」などの感情的な回答へとイメージが繋がっているように考えられる。

次に「受け手の感情」の大カテゴリーについての結果を考察する。

ここでは、舞踊（dance）を初めて鑑賞する受け手にとって、「考えさせられる」や「想像が膨らんだ」などの舞踊（dance）を思索的に捉える回答が多かった。「共感した」という回答（4人）もみられ、自分自身と作品とを重ね

合わせている鑑賞者がいた。

「作品の内容」では、「場面」を想像している回答、「作品の展開」や「テーマ性」を重視した回答など、あらゆる角度から舞踊 (dance) 作品を観ている印象を受けた。

その中でも、「訴えてくる」といった回答 (19人) が多く、同じ空間から踊り手の発している何らかの思いを、自分自身に「訴えてくる」と受けとめている。

次に、「表現」のカテゴリーについて考察する。ここでは、「感情を表現している」または、「動きに思いが込められている」といった人間の内面性を重視して捉えている回答が多かった。また、「何かを表現しているよう」など、具体的にはわからないが、舞踊 (dance) を「表現する媒体の一つ」として捉えている人が多いことがわかった。鑑賞前の「未経験者の舞踊 (dance) のイメージ」による結果と比較すると、作品鑑賞後では舞踊 (dance) を、「表現」という観点から捉えている人が20人以上増えていた。このことから、今回鑑賞した作品が、感情的な要素を多く含み、テーマ性をもっていたと考えられる。

「音楽的視点」による回答では、鑑賞前とは異なった回答が得られた。例えば、「テーマから音楽をつくっている」や「BGMのよう」など、音楽を副次的に受け取っていると思われる回答が多かった。また、「床で音を鳴らしている」といった演出的要素としての「音」に関する回答も得られた。

未経験者の中には、「自分と重ね合わせてしまった」という回答がいくつかあり、鑑賞によって、より身近に主観的に作品を受け止めているように思われた。

以上の結果、今回の作品を通して、あらゆる角度から解釈をしており、幅広い受け取り方の回答がでてきたと考えられる。

②鑑賞後の経験者の舞踊に対するイメージ

今回鑑賞した作品についての、イメージの自由記述を、未経験者と同様にKJ法で分析した。

I群 (運動の基本的な型) の大カテゴリーで

は9人の回答が得られた。その中でも、空間的な要素を重視した回答が多くみられ、動きの一部よりも全体を通して動きをみていると思われる回答であった。また、「衝撃のある」「激しい」などの強い印象を受ける回答が多く、これとは反対にやさしい動きの印象を受ける回答は見当たらなかった。

II群 (多様な感情を表した語) の大カテゴリーでは、未経験者の結果と同様に、「後向きな感情」と「前向きな感情」のカテゴリーに分けられた。

「後向きな感情」では「動的」「静的」のカテゴリーに分けられた。「動的」では、心の動きがあるもの、「静的」は心の動きが穏やかなものを表す語を含んでいる。

「動的」では、「外部の力」から想像できる感情を表す語が多数みられ、未経験者の結果にある「力」となる対象物を表す語はみられなかった。このことから、鑑賞者自身があたかも踊り手になったかのように感情移入をして、イメージを広げているように受け止められる。

「静的」では、「不安」「困難」などの回答が多かった。「前向きな感情」では、「力強さ」や「すすんでいく」といった回答が多くみられ、作品に対して同じような解釈をしている人が多いと感じた。

「作品全体の内容」では、1つ1つの場面をつなげてテーマを解釈している鑑賞者が多いと思われた。

以上のことから、経験者は、動きを一つの流れとして捉えており、その動きの質から内容をイメージすることが無意識に行われていると認められる。すなわち、動きを観るというよりも、そこで何が表現されているのかを全体を通して鑑賞しているといえる。

③未経験者と経験者間の比較考察

I群 (運動の基本的な型) について比較すると、まず動き自体を回答している人数が全く異なっていることが挙げられる。動き自体を作品のイメージとして答えている鑑賞者は、未経験者が圧倒的に多く、経験者はわずか9人が回答

しているだけであった。このことから、未経験者にとって動きは視覚的にも捉えやすく、作品のイメージとしても印象に残るものであると考えられる。

Ⅱ群（表しだされる多様な感情）については、未経験者と経験者ともに「後向きな感情」と「前向きな感情」に二分して捉えている。このことは、創作者が作品の中でいくつかの感情の変化を表現していたことから、鑑賞者はその中で最も印象に残った部分を回答している結果と思われる。今回の作品に対して「後向きな感情」を示した回答が108人、「前向きな感情」を示した回答が64人であり、後向きなイメージを持った鑑賞者のほうが多かった。

次に、「受け手の感情」では、未経験者の回答が多かった。中でも、「考えさせられた」「人それぞれの解釈ができる」といった捉え方をしている回答が多くみられ、舞踊（dance）を思索的に鑑賞する姿勢が回答に繋がったといえる。

「作品全体の内容」についての回答をみると、未経験者では作品の展開に重点をおいた回答がみられたが、経験者では作品全体を通したテーマをそれぞれが導きだしているように感じた。

未経験者からしか得られなかった回答として、「演技・演劇的」「無声映画」「詩的」などが多くあった。鑑賞前にはあまりこのような回答はみられず、未経験者にとって、それまでの「舞踊」の概念を覆すような回答だと捉えることができる。

以上の結果をふまえ、未経験者と経験者間には、作品を鑑賞する際、何に注目しているのかという点に大きな違いがあると認められた。

未経験者の多くは、舞踊（dance）鑑賞で、「動き」に重点をおいて鑑賞していることがわかった。その他にも「音楽」や「衣装」などの演出要素や、踊り手の感情について想像をめぐらすなど、さまざまな角度から作品をみていると思われた。

経験者は、動き自体を把握しつつもテーマ性を重視し、広い視野で作品を捉えているように感じた。その結果、経験者の鑑賞後のイメージでは、同じような回答が多く、経験者にとって

今回の鑑賞作品は受け取りやすいテーマだったと考えられる。

5. まとめ

ここでは、筆者（創作者）と鑑賞者間の作品に対するイメージという点から比較を中心に研究をすすめてきた。

本調査での舞踊（dance）鑑賞を通して、鑑賞者全体における作品内容の捉え方は、やや似通ったものであった。その一つの要因として、鑑賞者へ事前に「題名」を提示していたことが考えられる。「題名」が提示されたことによって、未経験者では想像の幅が広がり、逆に経験者ではテーマをよりわかりやすくさせてしまい、想像の幅を狭めてしまったのではないかと思われた。また、本作品を創作するにあたって、感情の起伏を表現することに重点をおいたことで、より説明的に捉えられてしまったようにも思われる。以上のことから、題名を提示せずにこの作品を鑑賞してもらった場合、未経験者と経験者にはより異なった解釈が得られたかもしれない、という課題が残された。

未経験者の中には、舞踊（dance）に対して、「表現的なイメージ」をもたない人が多く、鑑賞後の感想には、創作者が表現として特別意図していない動きや音を、断片的に指摘する回答が多くみられた。

これに対し、経験者の中でも特にモダンダンスやコンテンポラリーダンスを鑑賞したことがある人は、舞踊（dance）を「表現的」「人間の身体そのもの」として捉えていた。

今回の作品をとおして、未経験者の中には、「観ていて想像することがおもしろい」や「今の自分と重なった」などの意見が多数あり、今まで感じ得なかった舞踊鑑賞に対する新しい観方が発見されたように感じられた。

6. 今後の課題

筆者（創作者・踊り手）が、作品を創作する上で最も大切にしていることは嘘偽りのない身体で舞台にのっていることである。それは、その瞬間にしかあらわれない表現の中で、いかに

人間の「生」を表現できるか、という思いがあるからである。

今回の調査を終え、創作者自身が思っている以上に、鑑賞者一人一人が今まで生きてきた中で経験からくる、想像の世界をもっていると実感した。このことから、創作者（踊り手）にとって、自身の作品を様々な角度から客観的に捉えるということが、とても重要だと感じた。

次に、「コンテンポラリーダンス」についての現状および課題について論及する。筆者は日々、「コンテンポラリーダンス」のジャンルを志す人々と、全く「コンテンポラリーダンス」の世界を知らない人々との間では、舞踊（dance）に対しての理解が大きく異なり、その溝は絶えず深くなっているように感じている。

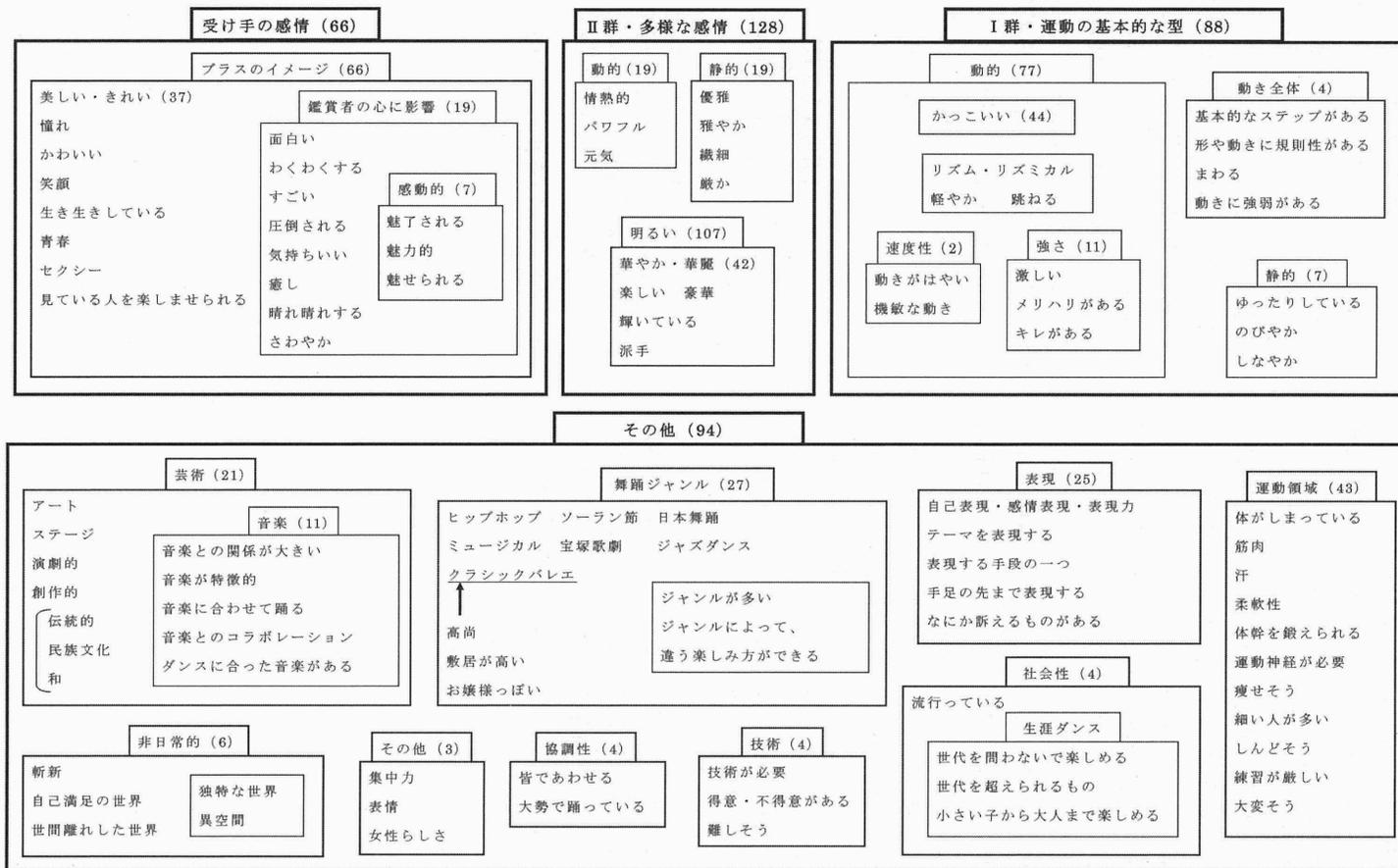
去年の夏にヨーロッパで行われたダンスフェスティバルに参加した際、前衛的な「コンテンポラリーダンス」の作品を滞在中に鑑賞する機会が多くあった。そこでは、創作者や踊り手が自己の世界に没頭しすぎて、客観性を見失いすぎていると思われる作品が数多くあるように感じ、また、そのために受け手は混乱してしまうように思われた。これは、筆者の偏った主観かもしれないが、日本における「コンテンポラリーダンス」が発展していく上での問題点として、「コンテンポラリーダンス」の多様性、ま

たは移り変わりが激しいことが、観る人に「難しい」「取っ付き難い」という思いを起こさせている一つの要因ではないかと考えられる。また、踊り手にとっても「コンテンポラリーダンス」というジャンルは、作品として不完全なままでも舞台にのせることができちゃう、手軽な感覚を持ちやすいジャンルでもあると考える。勿論、そのような感覚の舞踊家は少数であると思われるが、舞踊家は常に自分自身と舞踊（dance）との関係性を考える必要がある。

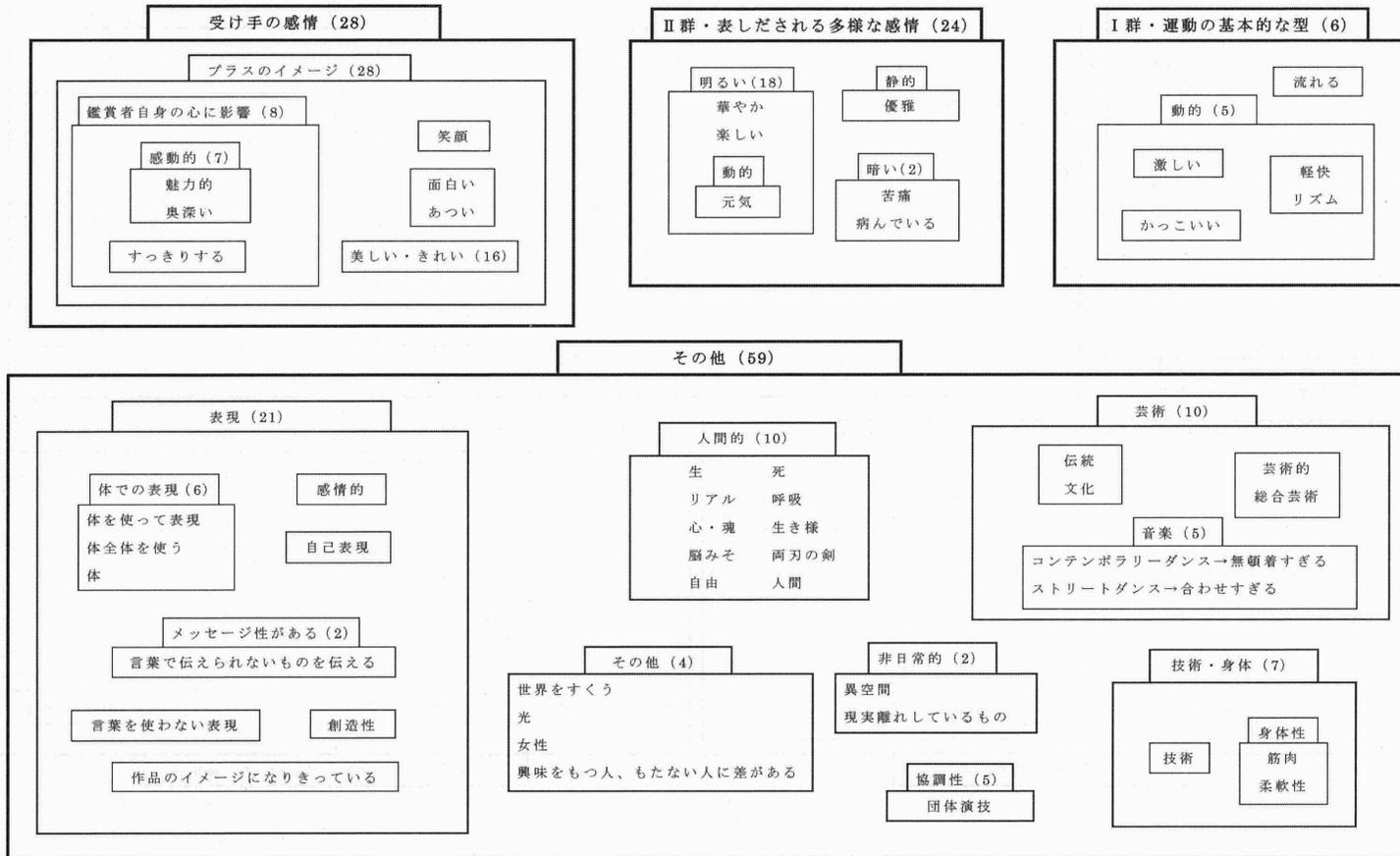
今後の舞踊（dance）の発展にとって、送り手と受け手の舞踊（dance）に対する価値観が、少しでも縮まるような活動が必要であるし、また、舞踊（dance）が多様化してきているからこそ、今まで以上に、双方が互いの存在価値について考えていくことが望まれるのではないかと考える。

【引用参考文献】

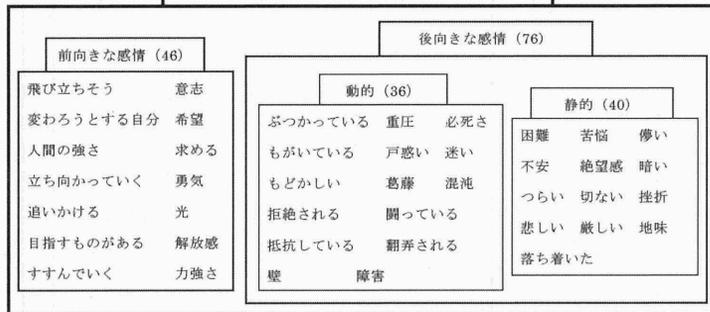
- 1) 川口千代 宮下充正（監修）「女性のライフステージからみた身体運動と健康」杏林書院 1995
- 2) 尼ヶ崎彬「ダンス・クリティーク 舞踊の現在／舞踊の身体」勁草書房 2004
- 3) 松本千代栄・川口千代・徳家雅子「動きの感情価に関する研究 その2. 舞踊作品の評定比較」東京教育大学体育学部紀要 第12巻別冊 1973
- 4) 川喜田二郎「発想法」中央公論新社 1967



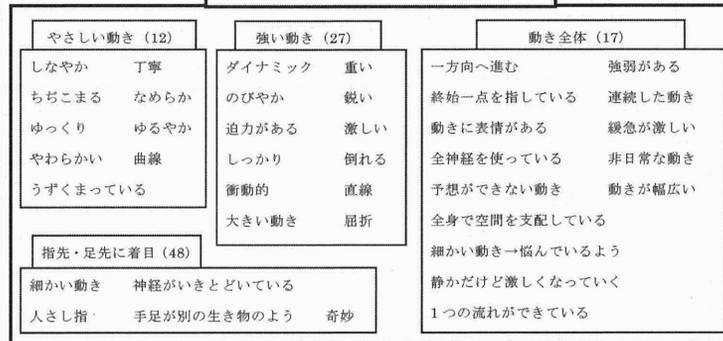
KJ法による鑑賞前 経験者のイメージ ※ () 内は、回答者の総人数



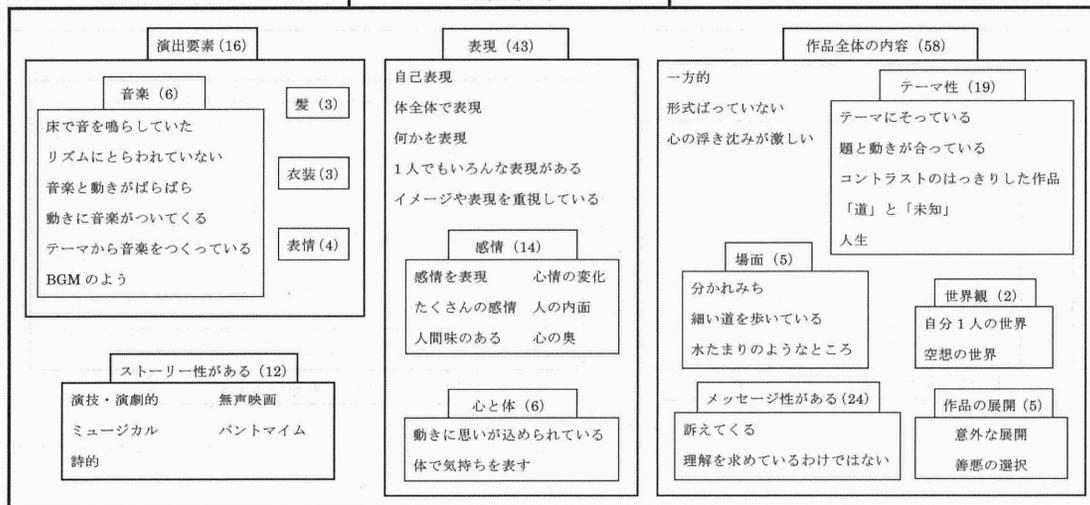
II群・表しだされる多様な感情 (122)



I群・運動の基本的な型 (104)



その他 (117)



受け手の感情 (37)

